

平成17年度
くにきゅうあと
恭仁宮跡発掘調査現地説明会資料
京都府教育委員会
平成17年11月26日

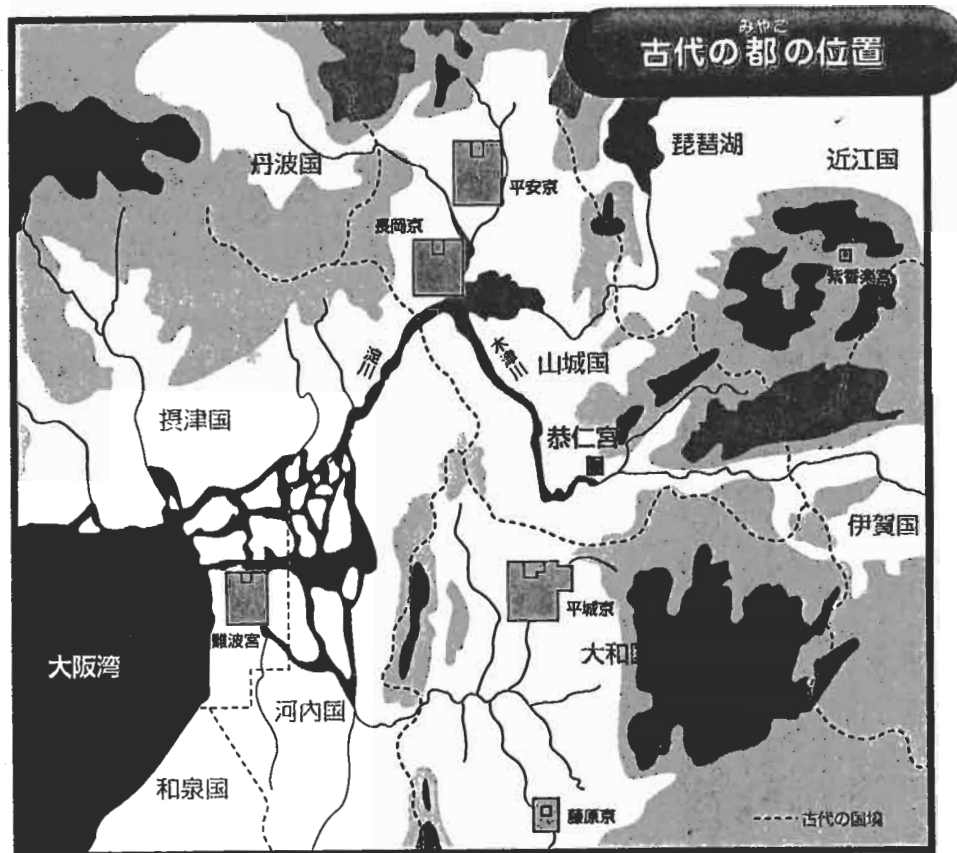
はじめに

京都府には、現在からおよそ1200年前に3つの都が造られました。

加茂町には天平の都・恭仁京が造られ、向日市・長岡京市・大山崎町・京都市の3市1町には長岡京が広がっていました。そして、京都市には千年の都・平安京が造られました。

恭仁京は、今からおよそ1260年前の天平12(740)年に瓶原^{みかのほら}に造られた奈良時代の都で、その中心となるのが「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏^{だいり}や、政治など国家の儀式が行われた大極殿^{だいごくでん}や朝堂院^{ちやうどういん}、さらには役人たちが仕事を行った役所^{かんが}など、国のなかでも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする加茂町・木津町の一帯は聖武天皇の時代に一時期ですが、国の首都となっていたのです。そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大阪の難波宮へと移り、さらには再び奈良の平城京へと戻されました。恭仁宮は短い役目を終え、その後、天平18(746)年には、山城^{やましろ}(山背)国分寺へと生まれ変わりました。



空から見た恭仁宮跡



A…大極殿院

B…朝堂院

C…内裏地区

0 100m

これまでの調査で分かっていること

京都府教育委員会では、昭和48年度から恭仁宮跡の発掘調査を行っています。これまでに内裏や大極殿など、建物跡などがいくつか見つかり、宮の中がどのようになっていたのかも少しずつ分かっています。

東西におよそ560m、南北におよそ750mの大きさで広がり、周りを大きな土塀（大垣）で囲んでいたことも分かりました。大極殿は宮内のほぼ中心に造られていて、高さ1mの大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもあった大きな建物でした。柱を大きな石材の上に建てる礎石（礎石）建物で、北西と南西の隅に使われた礎石は、当時のままの位置にあることが調査によって分かりました。また、平城宮などでは大極殿の北側には内裏が造られていますが、恭仁宮では、この場所に東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画があることが分かりました。これは、その他の都では見られない恭仁宮だけのものです。今は、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約98m、南北が約128mの大きさでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方が土塀（築地塀）、北側が板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西が約109m、南北が約139mの大きさでした。朝堂院ではこれまでに建物跡は見つかりませんが、周りを板塀（掘立柱塀）で囲んでいたことが分かり、南側に造られた門の跡（朝堂院南門・朝集殿院南門）も見つかりました。

今回の調査の目的は、大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）を見つけることです。発掘調査は10月11日から開始し、4地点（第1図）で合計330㎡の面積で行いました。

今回の調査で分かったこと

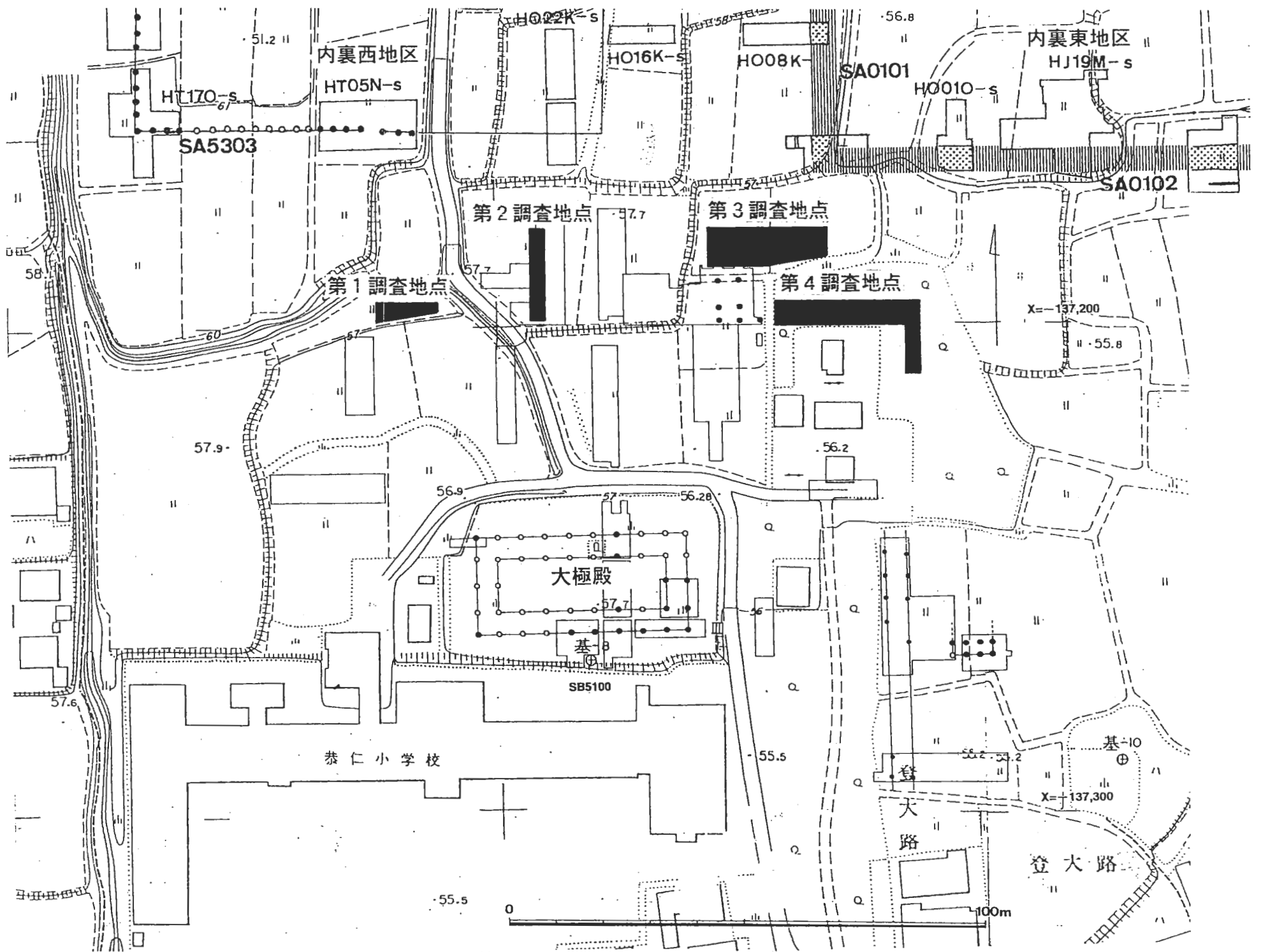
第1調査地点

ここは、大極殿を中心とし昨年見つけた柱跡を東へ折り返した対称の位置となる地点となっており、同じような柱跡が見つかるかどうかを確かめるために調査を行いました。

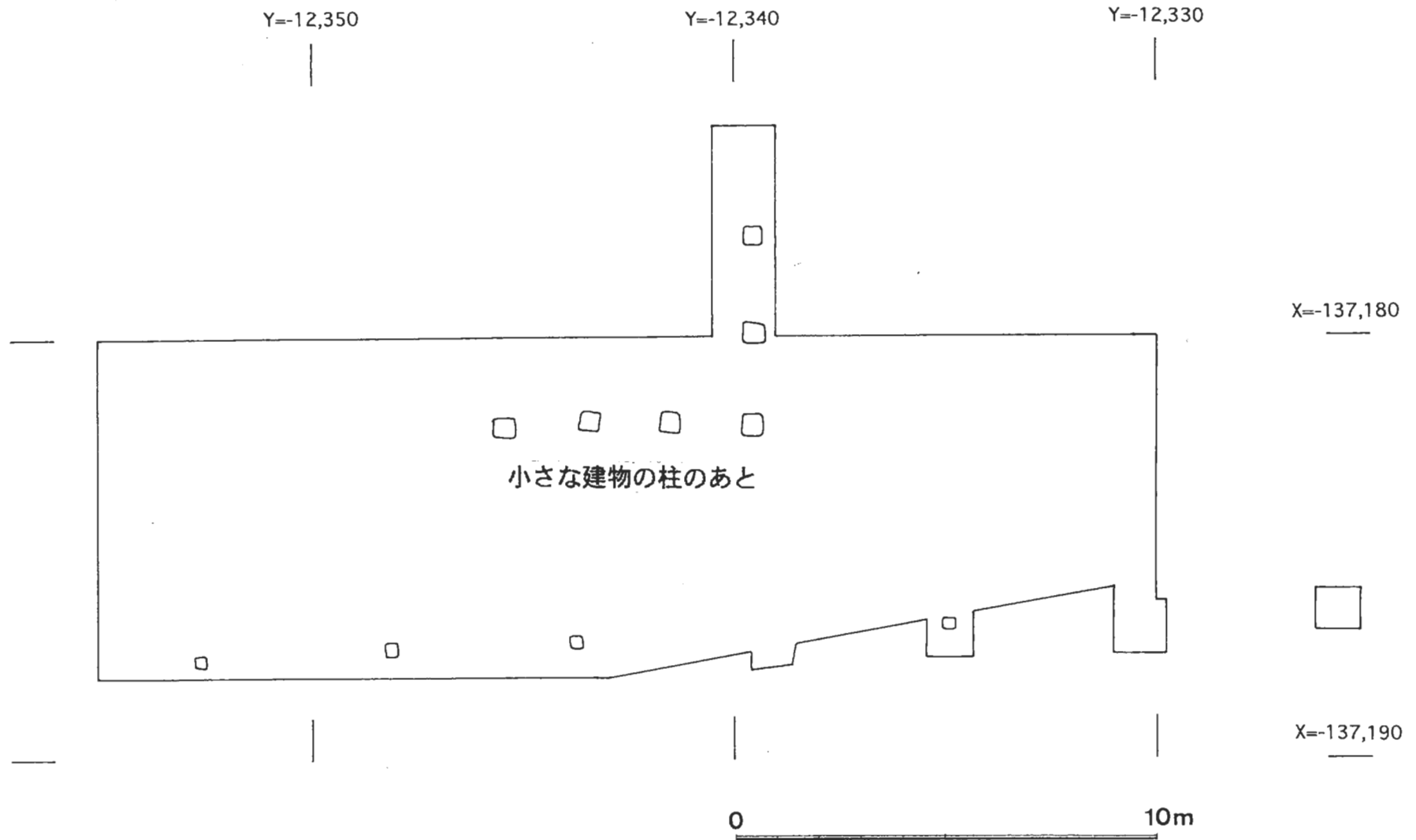
しかし、ここでは同じような柱跡は見つかりませんでした。

第3調査地点（第2図）

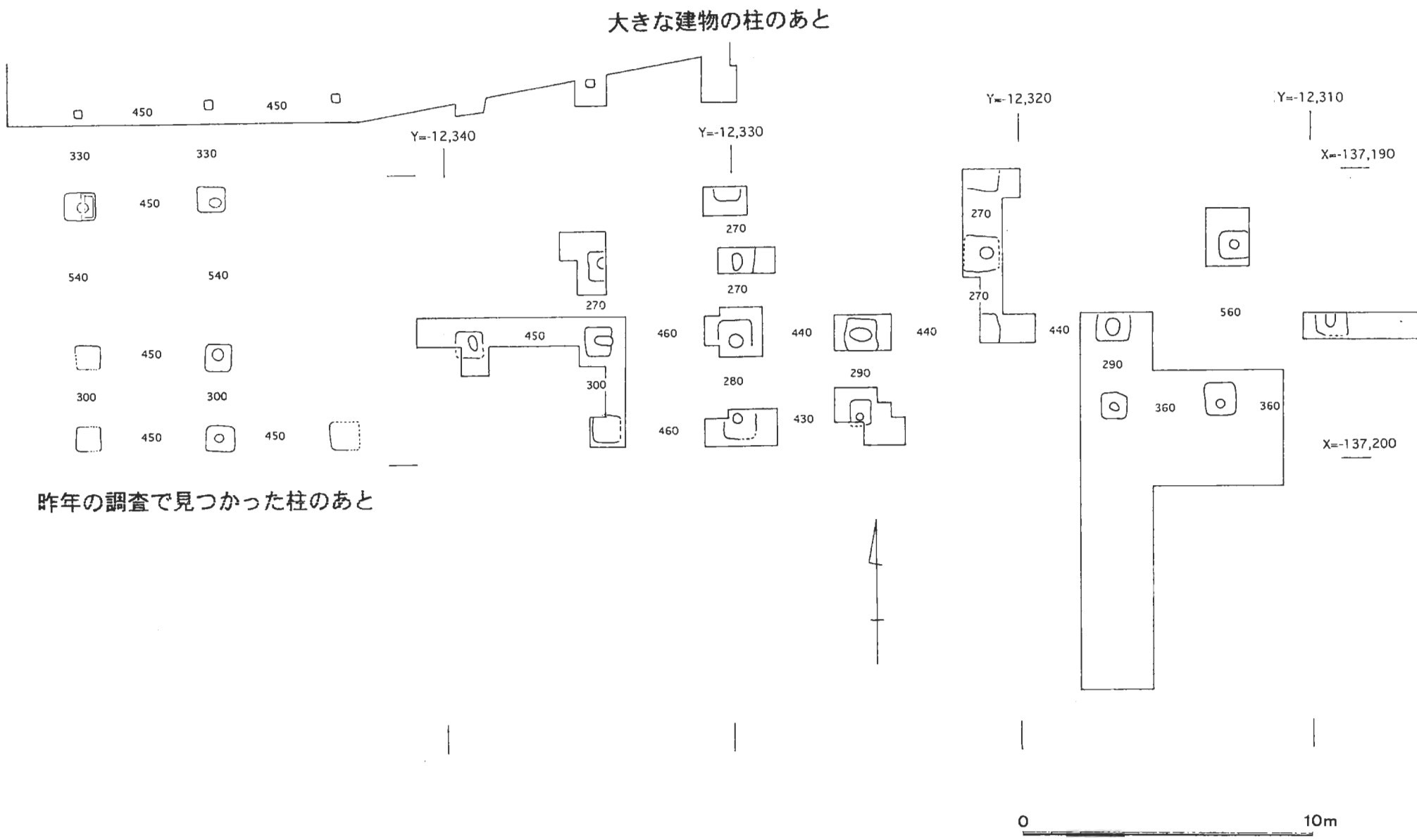
ここでは昨年の調査で見つけた柱跡が、北側に続いていくかどうかを確かめるために調査を行いました。同じような柱跡は見つからず、北側へは続いていかないことがわかりました。しかし、北側で別の小さな建物跡が1棟新たに見つかりました。この建物跡は、東西3間（柱と柱の間が3つあることを3間）（柱と柱の間が3つあることを3間といいますが）、南北2間の掘立柱建物跡で、柱穴はおよそ40cmの四隅が丸くな



第1図 調査地点の場所



第2図 第3調査地点で見つかったもの



第3図 第4調査地点で見つかったもの